

小学校中学年における「愛着」と「家族機能」の関係性の検討

The Consideration of the relations between“Attachment”and“Family Adaptability and Cohesion Evaluation”in Primary Schoolchild

谷澤 祐子

人文科学研究科

臨床心理学専攻

Yuko Yazawa

Graduate School of Humanities, Division of Clinical Psychology

要約

本研究は、小学校中学年において、児童の持っている愛着と、家族機能の関係性を検討することを第1の目的とし、学校間による家族機能・愛着の差異を検討することを第2の目的とした。小学3、4年生201名を対象に下位尺度『回避性』『両価性』からなる「愛着尺度」と、下位尺度『凝集性』『適応性』からなる「家族機能尺度」に基づいた質問紙調査を実施した。その結果として、①家族機能と愛着には正の弱い相関関係があり、②特に愛着の下位尺度『回避性』が家族機能の下位尺度『凝集性』『適応性』の高低に関係する。③小学校中学年の児童は「主要な愛着人物」「二次的愛着人物」を有し、「母親」を好きな児童は「母親」を「回避」する心理も働く傾向にある。④また、愛着人物をあげられない児童においては、特に、家族機能の下位尺度『適応性』を低くする＝家族の役割構造を硬化させる、ことが安定した愛着形成に有用である可能性がある、ということなどが得られた。

【キーワード】『回避性』 家族 愛着形成

I. 問題と目的

1. 家族と家族機能

(1) 現代の家族

1) 家族と社会

近年の「家族」論を社会情勢との連動でとらえる方法は一般的である。たとえば畠中(2004)は、現代社会の家族問題を「富裕化社会における子ども家族問題」と位置づけ、現代社会の特質のひとつである「富裕化」がその要因であることを示唆している。岡堂(2001)、柏木(2003)、亀口(2004)

など複数の研究者から聞こえてくる、現代家族をあらわすキーワードは、「価値観の変化」「縮小」「崩壊」「多様化」「低下」「危機」「喪失」、といったところであろう。

2) 家族の機能

また、家族は社会に対して、また個人に対して、さまざまな働きをしている。この働きのことを「機能」と言う(野村、2002)。代表的な家族機能論は、Ogburnが1930～1980年に発表した「機能縮小論」と「機能特殊化論」である(石原、2000)。森岡

(1979)の説明によると、米国の社会学者、Ogburnは近代工業勃興以前は「①経済②地位付与③教育④保護⑤宗教⑥娯楽⑦愛情をあげ、7つの機能を果たしていた」と紹介している。しかし近代工業が勃興すると、①～⑥の機能は吸収・喪失もしくは弱体化し、「⑦の機能は維持されている」としている。

目黒(1990)は、富裕化、情報化などにリンクした社会システムの変化に伴い、多種多様な機能集団の発達によって、かつて家族が果たしていた機能が代替され、家族に残された機能は、1953年のParsonsの著書の引用から、「子どもの社会化」と「パーソナリティの安定化」であると述べている。

畠中(2003)は、子どもの養育に関して、『戦後社会が「自立」に肯定的価値観を付与してきた対極に「甘え」「依存」の排除があった』ことを指摘し、「子ども家族問題を探る一課題」としてその「再評価」を提唱している。すなわち家族関係や社会関係の場において、『「依存」「甘え」を受け入れてくれる親密な他者の存在によって、人は「自立」を可能にする』。

前述のParsonsをはじめとする複数の研究者の提唱する家族機能の一部を「子どもの社会化、教育機能」とする理論や、畠中(2003)の言う『「依存」「甘え」を受け入れてくれる親密な他者の存在』との関係性、などから、ここに「愛着」という概念を用いることができるのではないかと筆者は考える。

3) 家族内のかかわり

家族内の成員のかかわりについて、興味深い資料がある。大野(2010)は、2001年

に家族のさまざまな関係を「どのくらい『家族らしい』と思うか」の度合いを評定してもらった結果、気持ちが通じ合っていると実感できること」が「家族であること」の条件である、としている。

(2) 「凝集性」と「適応性」

一方、1980から1990年代にかけて、米国では家族研究、家族療法に関する研究が隆盛を誇っていた。立木(1999)によると、その中でOlson *et al* (1985)は、「きずな」「かじとり」が家族機能を決定する「中心的2次元」であるとし、この2次元を組み合わせ「円環モデル」を発表した。「両次元とも中庸でバランスのとれた状態の時、家族システムの機能が最適になる(立木、1999)。」

一方、そこからはずれて「極端に高いか低いか逸脱すると機能不全になる、とするカーブリーニアな関係」を仮説とした。英語版ではきれいな「カーブリーニア仮説」が実証されてきたが、日本語に翻訳して実施されたFACES翻訳版の尺度特性は、英語版とはまったく異なり、カーブリーニア関係は「未だ実証されていない」と立木(1999)は述べている。

2. 愛着

(1) 定義

「愛着」の定義は3つの変遷がある、とされ、最初はBowlby(1969)が「情緒的絆」を「アタッチメントattachment」と名づけ、「絆」を重視したが、1978年にAinsworthによって、それを「行動システム」として具体的な行動としてとらえ、それが1980年代Mainの世代になって、「愛着表象」となった(近藤、2006)。現在は「安全基地で

保護を得て、自身が安心・安全であるということを保障されるメカニズム」(近藤、2006)と定義される。

発達の観点からみると、アタッチメント行動システムは真の危機事態や疲弊時に、特定の対象に保護と心理的安全感を求めるものであり、子ども時代のみならず、生涯を通じて活性化し続ける、という(久保田、2008)。

(2) 「回避型」と「両極型」

「ストレンジ・シチュエーション法 (Strange Situation Procedure: SSP)」によって乳児のアタッチメントパターンを評定しようとしたAinsworth *et al.*は、不安定アタッチメントパターンとして、乳児の行動を「回避型」と「両極型」と位置付けた(数井、2012)。

また、数井(2012)は、Main *et al.*によって、「無秩序・無方向型 (D型)」-強い分離抵抗を示し、ドアの傍らで母を求めるが、再会時には回避する、方向が定まらず、無目的に部屋の中を動く、など-が新たに位置付けられた、ことも述べている。

さらに、久保田(2008)は『これらの行動は乳児側の「適応方略」であって、その関係を維持していこうとすることの顕れである』と述べている。

(3) 愛着人物

Bowlby(1976)は、多くの乳幼児は「一人以上の人物」にアタッチメント関係を形成することを指摘し、母親とともに、それらの人が子どもにとっての特別なアタッチメント人物であることを見出したことを述べている。

他にも、久保田(2008)によると、生物的な「親」に限らず、祖父母、兄姉や保育

士などの家庭外の「ケア提供者 (Howes *et al.*, 1988)」も、重要なアタッチメント人物として特別な機能を果たしている、ことが多くの研究で実証されているという。

これをBowlby(1976)は「主要な愛着人物」と「二次的愛着人物」と呼び、区別している。

(4) 愛着の発達モデル

個体は複数の人へそれぞれ固有な愛着を形成する、という考え方が実証され、近藤(2006)も指摘しているように、近年は2つのモデルが生まれた。そのひとつは「組織化総合モデル」である。子どもは複数の愛着人物との愛着関係を1つの表象に統合する、という考え方である。どれか一つの関係性が優位となるのではなく、ある愛着が不安定であると、他の安定した愛着がこれを補償するように機能する、というものである。

もうひとつは「独立的組織化モデル」である(古澤、2010)。「組織化総合モデル」と同じように複数の愛着人物との愛着関係を持つが、それぞれの間人間関係において形成された愛着が相互に影響を受けることなく、その範囲でのみ安全の基地となって保持される、という立場をとるもの、とされている。

(5) 児童期の愛着の発達

遠藤(2012)は、児童期の発達期におけるアタッチメントの標準的発達としてBowlbyやAinsworthの見解を引用し、養育者への近接そのものの実現から、養育者の心的状況を理解し、自らのアタッチメント行動の目標・計画を柔軟に調整することに移行していく時期である、としている。

遠藤(2012)はさらに、主要なアタッチ

メント対象は養育者のままであることが圧倒的に多く、特に児童期後期から青年期前期にかけ、児童は、養育者に対して徐々に「回避的」態度をとることが強まり、少なくとも「行動上の依存性」は少なくなり、「心理行動的独立性」が高くなる傾向にあるようだ、と紹介している。

3. 目的

以上のような視点から子どもの愛着の形成に、母親のみならず家族の存在の重要性が考えられる。

これまで見てきたような社会・経済的状況の変動に伴う変容によって、家族機能は縮小化・私事化し、生殖・養育機能のほかに愛情や共通の関心で結ばれる「愛情と文化の機能」が残る、とされている(宮坂、2001)。

一方、愛着理論においては、複数の愛着人物と複合的愛着関係を築く、という考え方は、もはや一般的である。加えて、前述したように、「実証の空白期」(遠藤、2012)と言われた児童期に、発達的な移行が見られる、という研究も蓄積されつつある。

しかし、児童を対象にした、愛着と家族の関係性を検討した研究はまだ見当たらない。

そこで本研究では、小学3、4年における「愛着」と「家族機能」との関係性に焦点を当て検討することを第1の目的とする。

また、小学校間の児童の「家族機能」と「愛着」の特徴に差異があるかどうかを検討することを第2の目的とする。

II. 方法

1. 調査対象者

S県内の小学校AおよびBの2校3、4年生201名(男子90名、女子101名)

2. 調査時期・方法

2013年3月 授業中に質問紙を配布。その場で回収。

3. 調査内容

① 基本情報

1. 学年
2. 性別
3. 家族の中で好きな人

② 家族機能測定尺度：家族機能を測定する尺度…1985年発表のOlson *et al*のFACE IIIを草田・岡堂(1993)が和訳した日本語版FACES III

(『凝集性』・『適応性』の2下位尺度、20項目5件法、一部逆転項目あり)

(例：家族がまとまっていることは、とても大切である)

③ 母親に対する愛着尺度：児童の母親に対する愛着を測定する尺度…本多(2007)によって開発された母親に対する愛着尺度

(『回避性』・『両価性』の2下位尺度、15項目4件法、一部逆転項目あり)

(例：☺(；原文では「お母さん」だが、倫理的配慮から「家族の中で一番好きな人」をあげてもらい、その人を☺と表記した)は、私の気持ちをわかってくれます)

なお、本尺度は、以下「愛着尺度」と表記する。

また、①と②の下位尺度の定義をまとめると次のようになる。

尺度名	下位尺度	定 義
家族機能尺度	凝集性	家族メンバーが互いに持つ情緒的つながり
	適応性	状況的・発達の危機があった時、家族システムの勢力構造や役割関係を変化させる能力
愛着尺度	回避性	☺は愛してくれているだろうが頼ることへの抵抗・回避
	両価性	☺を過剰に求めたいが拒否される不安との葛藤

4. 分析

欠損値には各質問項目の平均値を入力した。

(1) 2つの小学校<総合>について

- ① 「家族機能尺度」と「愛着尺度」の相関をピアソンの積率相関係数で求める。
- ② 「家族機能尺度」の下位尺度『凝集性』『適応性』の得点を、I.1.(2)のように「カーブリニア関係」が実証されていないため、その尺度の設定得点の中央値を境に高群・低群に分ける。その2群間の『回避性』得点について t 検定を行う。
- ③ <好きな家族>（児童が愛着を示す人）を一人記入してもらい、度数と割合を調べる。
- ④ 2親等までの<好きな家族>を独立変数、「愛着尺度」およびその下位尺度である『回避性』『両価性』を従属変数とし、一元配置の分散分析を行う。
- ⑤ 「家族機能尺度」の下位尺度『凝集性』および『適応性』の高群低群と、<好きな家族>を独立変数とし、「愛着尺度」を従属変数として2要因の分散分析を行う。
- ⑥ 「愛着尺度」の下位尺度『回避性』『両価性』の尺度設定得点の中央値を境に高群・低群に分ける。その高低を組み合わせた“4つの愛着の型”（尺度中に

規定）と、「家族機能尺度」の下位尺度『凝集性』の高群低群との χ^2 乗検定を行う。

- ⑦ <好きな家族>を記入できなかった群について「家族機能尺度」と「愛着尺度」の相関をピアソンの積率相関係数で求める。
- ⑧ ⑦の群について、「家族機能尺度」の下位尺度『適応性』の高群・低群における「愛着尺度」得点について、 t 検定を行う。

(2) 2つの小学校<別>について

- ① 2つの小学校と、「家族機能尺度」の下位尺度『凝集性』および『適応性』のそれぞれの高群低群との度数の差異について、 χ^2 乗検定を行う。
- ② 2つの小学校と、<好きな家族>について χ^2 乗検定を行う。
- ③ 2つの小学校と、“愛着の型”について χ^2 乗検定を行う。
- ④ 2つの小学校の「愛着尺度」の下位尺度『両価性』について、 t 検定を行う。

5. 倫理的配慮

質問紙実施にあたり、跡見学園女子大学文学部臨床心理学科倫理委員会において承認を受けた（申請受理番号13001）。

Ⅲ. 結果と考察

1. 2つの小学校<総合>の結果のまとめ

(1) 「愛着」「家族機能」尺度間の相関関係

「家族機能尺度」と「愛着尺度」との尺度間には弱い正の相関関係があった ($r = .229, p < .01$)。また、「愛着尺度」の下位尺度『回避性』は、「家族機能尺度」の下位尺度『凝集性』『適応性』とも弱い正の相関関係があった (順に $r = .342, r = .245$, ともに $p < .01$) (表1)。

表1 「家族機能尺度」と「愛着尺度」の下位尺度の相関関係

「家族機能尺度」	(母親) に対する 「愛着尺度」		
	回避性	両価性	
	.229**		
凝集性	.342**	.004	n.s.
適応性	.245**	.002	n.s.

N = 201
** $p < .01$

このことから、家族が互いに持つ情緒的つながり (凝集性)、および家族システムの勢力構造や役割関係などを変化させる能力 (適応性)、という要因と、好きな家族を回避する、しない (回避性) という愛着心理・行動の要因の関係性が高いことがうかがえる。

(2) 「愛着」の下位尺度『回避性』と「家族機能」の関係性

愛着の下位尺度『回避性』は、「家族機能尺度」の下位尺度『凝集性』および『適応性』のそれぞれ高群・低群間において、有意な差を示した (順に $t(199) = 4.049, p < .001, t(199) = 2.640, p < .01$)。

この結果から、家族が互いに情緒的つながりをより多く持ち (凝集性高い)、家族システムの勢力・役割構造をより変化させ

る (適応性高い) と、子どもは愛着を感じる対象を回避する傾向があることが示唆される。

(3) <好きな家族>からみた「愛着」と「家族機能」の関係性

1) 児童の<好きな家族>

児童に<好きな家族>を一人あげてもらったところ、<母親>を好き、と答えた児童は約半数、<父親>を好き、と答えた児童は約4分の1、<兄>、<姉>、<弟>、<妹>など自分のきょうだいを好きと答えた児童は、あわせて約1割強だった。

I.2.(5)の先行研究では、「児童期では主なアタッチメント対象は、養育者のまま、であることが圧倒的に多い (遠藤、2012)」ことを考えると、<父親>も「主な養育者」として<母親>に追随する役割を果たしていることがうかがえる。

<父>のほかにも<きょうだい>が好き、などの結果からI.2.(3)で前述したように、Bowlby (1976) のいう『「主な愛着人物」および「二次的愛着人物』を、児童が得ている顕れ、と見ることが出来ると思われる。

2) <好きな家族>と「愛着」の下位尺度『回避性』の関係性

次に、<好きな家族>によって「愛着尺度」に相違があるかをみるために、2親等 (父母、きょうだい、祖父母) までの家族に絞って一元配置の分散分析を行った。その結果、「愛着尺度」の下位尺度『回避性』において、<母親>と、<父>・<兄>・<妹>間で有意差がみられた ($F(7, 178) = 2.276, p < .05$) (図1)。

この結果から、<母親>を好きな児童は同時に<母親>を回避してしまう傾向が高

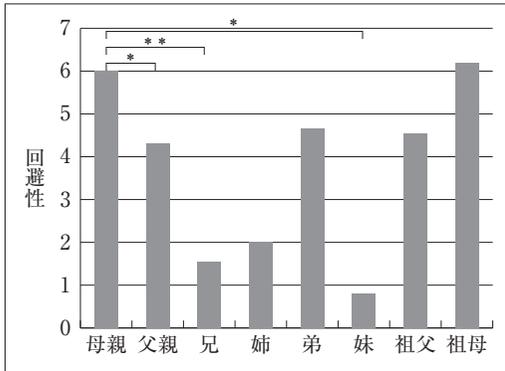


図1. <好きな家族>別の『回避性』尺度得点
** $p < .01$ * $p < .05$

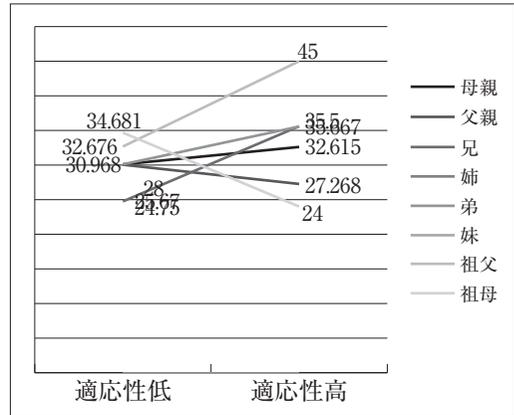


図2. 『適応性』の高低による、<好きな家族>別の愛着尺度の交互作用 (タテ軸は愛着尺度)
* $p < .05$

いことがうかがえる。ここでは、①<母親>に嫌われたくない、という心理が働いている②乳幼児期からの、主たる保育者の可能性が強い母親に“飲みこまれる不安”から、回避して均衡を保とうとする、などの理由が考えられる。

3) 「家族機能尺度」と<好きな家族>からみた「愛着尺度」

「家族機能尺度」の下位尺度『凝集性』・『適応性』の各高群・低群と児童の<好きな家族>を独立変数、「愛着尺度」を従属変数とし、2要因の分散分析をおこなったところ、『適応性』の高群・低群と<好きな家族>の交互作用がみられた ($F(6, 181) = 2.388, p < .05$) (図2)。

さらに単純主効果の検定を行ったところ、<好きな家族>が<兄>である場合の『適応性』の高群低群の単純主効果が有意であった ($F(1, 181) = 4.028, p < .05$) (図3)。

具体的には、<好きな家族>が<兄>である児童は、<好きな家族>が<兄>以外である児童に比べ、「家族機能尺度」の下位尺度『適応性』、つまり家族の役割・構造が変わりやすいか否かによって、有意な

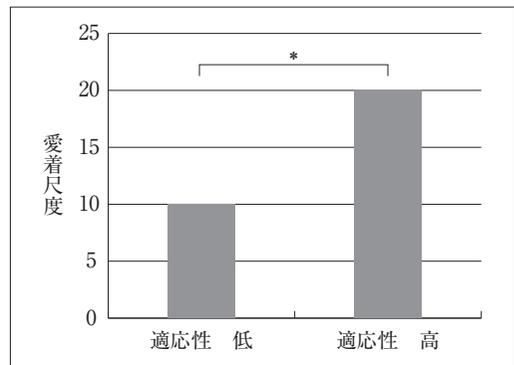


図3. <好きな家族>が<兄>における『適応性』の高群低群による「愛着尺度」の単純主効果
* $p < .05$

「愛着尺度」得点の差を示す。すなわち、<兄>がいて、『適応性』が低い(=役割・構造が変わりにくい)家庭の児童は安定した愛着を持つ傾向がある、ということが示唆される。

(4) “愛着の型”と「家族機能」の関係性

「愛着尺度」の2つの下位尺度『回避性』『両価性』の高群低群を組み合わせた4つの“愛着の型”と、「家族機能尺度」の関係を調べた。“4つの愛着の型”と「家族機能尺度」の下位尺度『凝集性』の高群低群との χ^2 乗検定の結果、人数の偏

りは有意であった ($\chi^2=11.341$, $df=3$, $p<.05$)。

残差分析によると、『凝集性』が低い群では、“とらわれ型” (『回避性』低、『両価性』高) の“愛着の型” が有意に多く、逆に『凝集性』が高い群では、“とらわれ型” の“愛着の型” が有意に少ない、という顕著な特徴が示された。

この結果のように、家族との情緒的つながりが低い、つまり心理的な距離があると、愛着対象を回避することは少ないが、その心理的距離があることで、愛情と憎悪、尊敬と軽蔑などの相反する感情 (『両価性』) を同時に抱く、心理状態に陥りやすい傾向があると言えるのではないだろうか。

(5) <好きな家族>名を記入できなかった群における「愛着」と「家族機能」の関係性

<好きな家族>の家族名を記入しなかった、もしくはネコ、など動物をあげた群の「愛着尺度」と「家族機能尺度」の間には、強い正の相関関係がみられた ($r=.956$, $p<.05$)。また、「愛着尺度」に対して、「家族機能尺度」の下位尺度『凝集性』『適応性』それぞれの間にも、強い正の相関関係がみられた (『凝集性』 $r=.921$, $p<.05$ 、『適応性』 $r=.887$, $p<.05$)。

さらに t 検定を行った結果、この群の「愛着尺度」は、「家族機能尺度」の下位尺度『適応性』の高低によって、有意に差を生じることが分かった

($t(3)=3.194$, $p<.05$)。ちなみに、調査対象者全体の「愛着尺度」と『適応性』の高低群の関係は、 t 検定で有意でなかった。

この群の「愛着尺度」の得点は、架空の代替対象やペットなどの、“仮の愛着対象” に対して児童が答えた結果、という仮説が考えられる。リアリティがないからこそ、他の群には見られない、その「愛着尺度」と「家族機能尺度」との相関関係の高さが示されたのかもしれない。

2. 2つの小学校<別>の結果のまとめ

(1) 2つの小学校における「家族機能」の差異

2つの小学校<別>の、「家族機能尺度」の下位尺度『凝集性』『適応性』の高群低群の度数の分布は、両校とも『凝集性』高群が約7割、『適応性』低群が約7割、という結果になったが、 χ^2 乗検定の結果はどちらも有意でなかった。

(2) 2つの小学校における<好きな家族>の差異

質問紙を配布した2つの小学校<別>の、<好きな家族>別の人数の偏りは有意であった ($\chi^2=33.053$, $df=12$, $p<.01$)。

この結果からは、同一市町村であっても、その学校の位置するエリアによって形成する愛着の対象が異なることが明示された。残差分析から、A小学校は有意に多い<好きな家族>がいなかったが、とりわけ<みんな>と<弟>、<妹>をあげた児童が有意に少なく、B小学校は<みんな>と<弟>、<妹>をあげた児童が有意に多く、有意に少ない<好きな家族>は見られなかった。

A小学校が特徴的に<好きな家族>がいなかったのは、日本人と外国人との混血児童が多く在籍して (本調査対象クラスA小学校; 11.1%、B小学校; 7%) 家族

の文化が日本と異なることによって、愛着を感じる対象に差異が生じた、ということもひとつにはあるかも知れない。日本とスリランカの幼児を対象に、心の理論と親の愛着の関連と文化的差異を研究した久崎(2011)によると、親に対して持つ愛着の型と心の理論の発達の関係は、日本とスリランカでまったく逆を示す結果を示した、という研究も報告されている。

(3) 2つの小学校における“愛着の型”の差異

さらに2つの小学校<別>の“愛着の型”の度数の差は有意であった($\chi^2=11.693$, $df=3$, $p<.01$) (表2)。

表2 小学校別“愛着の型”のクロス表

			小学校		合計
			A	B	
愛着の型	愛着恐怖	度数	58	35	93
		調整済み残差	-2.7*	2.7*	
	愛着軽視	度数	69	16	85
		調整済み残差	2.7*	-2.7*	
	とらわれ	度数	11	1	12
		調整済み残差	1.6	-1.6	
	安定	度数	6	5	11
		調整済み残差	-1.3	1.3	
合計		度数	144	57	201

備考：残差の絶対値が1.96以上であれば、有意水準5%(*)で有意に特徴的である。残差が+であれば「多い」、-であれば「少ない」を意味する。

(4) 2つの小学校における『両価性』の差異

(3)の結果から、A小学校とB小学校では異なる“愛着の型”が示された。この“愛着の型”の相違は「愛着尺度」の下位尺度『両価性』の高低によるものである。そこで、2つの小学校の『両価性』の平均値を比較してみたところ、有意にB小学校の方が高かった ($t(199)=2.911$, $p<.01$)

この結果で示された、A、B小学校それぞれ多かった、2つの“愛着の型”の共通する点は「愛着尺度」の下位尺度『回避性』が高いということ、相違点は、「愛着尺度」の下位尺度『両価性』が一方の学校は高く一方の学校は低い、という点である。

共通点の『回避性』が高い、という理由については、I.2.(5)で述べたように、児童期が愛着の発達過程から見てその質の変容期にあたり、一般的に「回避の傾向が高く」なっている、などが考えられる。

相違点の『両価性』については次項で検討する。

(図4)。

こうなった要因について、さまざまな考察ができると思うが、まずはⅢ.1.(4)で述べたように、『両価性』の高さと「家族機能尺度」の下位尺度『凝集性』の高さは連動していることから、B小学校の児童の方が、より家族が心理的に密接であった、ということだと思われる。

別の理由としては「地域性の相違」—A

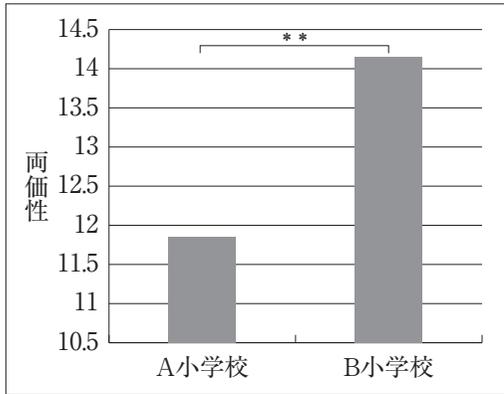


図4. 2つの小学校別の『両価性』
** $p < .01$

校は交通・商業の利便性低いところに位置し、B校は交通の便の良い商業地帯に位置する一があげられると思う。地域性の違いによって、家族の生活時間の緊密性、細分化性が異なり、形成される愛着に影響することが推測される。生活が細分化され、多忙であると人々の心が不安に揺さぶられ、その結果、一貫性に欠ける状況が生じやすくなることも考えられるだろう。

3. 本研究から示唆されること

現代は女性の社会参加が欧米並みに盛んであり、母親の父親化、父親の母親化、親の子ども化、子の親化、が当然のように見られる風潮があるが、一見合理的なようであるが、子どもが安定した愛着を形成するうえで何らかの検討すべき点があるのかもしれない。また、家族の互いの情緒的つながりが強い、つまり家族が密着していると、不安定な愛着の型のひとつが形成されやすいことは、現代の少子化の家族心理の一辺を反映しているのではないだろうか。

そして、本研究は、子どもの鬱や不登校などの諸問題にもその予防や対処を考える上で有益な視点を示唆するのではないかと

考える。

IV. 本研究のまとめと今後の課題

1. 本研究のまとめ

以上の結果・考察より本研究、“小学校中学年における「愛着」と「家族機能」の関係性の検討”は次のようにまとめられる。

- ① 家族機能と愛着の関係性の間には弱い正の相関関係が存在する。また、特に愛着の『回避性』という要因が家族機能と関係している。
- ② 『回避性』の高低は、「家族機能尺度」の『凝集性』『適応性』の高低と連動する。家族が密着しているか否か、家族役割・構造が硬いか柔軟かによって、好きな家族を回避するかしないかに関係する。
- ③ 小学校中学年のほとんどの児童は「主要な愛着人物」か「二次的愛着人物」を所有する。なおかつ、愛着の発達モデルとして「組織的総合モデル」、もしくは「独立的組織化モデル」を構築している可能性が見られる。
- ④ 小学校中学年では、従来愛着研究の主役であった、主たる養育者である<母親>に対する愛着は、他の家族と比べて、好きであると同時に回避しようとする心理も働きやすい。
- ⑤ 小学校中学年においては、いわゆる愛着における「母親神話」は消滅し、本研究ではとりわけ<兄>の存在が注目される。<兄>がいて家族役割・構造が決まっている家では安定した愛着が形成されやすい可能性がある。
- ⑥ そのような家庭では、すなわち、母親は

母親、父親は父親、といった本来の役割を果たし、例えば質問紙に沿って考えると、家族の決まりを作ったら一貫性を持たせる、子どもを叱るときは毅然と叱る、といったことが安定した愛着に影響している。

- ⑦家族が互いに情緒的つながりが低い場合には、不安定な愛着のひとつ、「回避傾向は高くないが、欲求不満的で相反する感情の葛藤を生ずる愛着」が形成されやすい。
- ⑧児童に愛着対象が不在の場合、代替の対象に愛着を感じることで、家族の強い情緒的つながりおよび柔軟な家族構造の存在、という関係性が特に強く、そのことが愛着の不安定化を促進させている可能性が高い。この場合、とりわけ家族の役割構造をきちんと構造化することが安定した愛着の形成につながる可能性がある。
- ⑨本研究の小学校中学年では、“愛着の型”に関して、『回避性』の高さを多くの児童が示した（201名中178名）。これは、愛着の発達過程で必然に起こっている、一般的現象である可能性がある。
- ⑩2つの小学校間の家族機能に関する、特徴的な差異は見られない。
- ⑪2つの小学校間の〈好きな人〉、“愛着の型”の結果が有意に異なることから、小学校中学年の愛着の発達・形成には地域性、家族の生活時間、民族文化といった条件も大いに関連がありそうである。

2. 今後の課題

今後の課題としては、

- ①調査校が限られた市内であったため今後

さらにその調査範囲を広げる。

- ②ピアジェという形式的操作期から、愛着が変容するとされるため、今回の対象者の追跡調査をおこない、今回の研究との比較検討を行う。

- ③今回の研究で多くの結果を得ることができたが、焦点を絞って研究を深化させる。

などがあげられる。

今後はさらに研究を進めて、一般化できるような有用な知見を導き出し、臨床活動に役立てたいと考える。

付記

このたび本論文作成にあたり、調査にご協力いただきましたA、B小学校校長、また丁寧にご指導いただきました野島一彦教授、に深くお礼申し上げます。

引用文献

- 遠藤利彦(2012)．生涯発達と発達臨床の視座から見るアタッチメント理論の現在．小林隆児・遠藤利彦(編)．「甘え」とアタッチメント．遠見書房，pp 195-208．
- 古澤頼雄(2010)．子どもはだれと愛着を形成するか．柏木恵子(編)．柏木恵子(編)．よくわかる家族心理学．ミネルヴァ書房，pp 142-143．
- 畠中宗一(2003)．現代家族の特質．畠中宗一(編)よくわかる家族福祉．ミネルヴァ書房．pp.6-21．
- 畠中宗一(2004)．現代社会と家族機能．世界の児童と母性．(財)資生堂社会福祉事業団．57．pp 2-5．
- 本多潤子(2007)．母親に対する愛着尺度．

- 櫻井茂男・松井豊（編）. 心理尺度測定集Ⅳ子どもの発達を支える「対人関係・適応」. サイエンス社. pp 172-175.
- 久崎孝浩(2011). 心の理論発達と親の愛着の関連性：その文化的差異（発達、その他、ポスター発表）. 日本教育心理学会総会発表論文集, (53), pp 418.
- 石原邦雄(2000). 家族と生活ストレス. 放送大学教育振興会. pp 40-42.
- John Bowlby(1969). *Attachment and Loss. ATTACHMENT Second Edition. BASIC BOOKS. HARPER. TORCH-BOOKS. xi-xvi.*
- John Bowlby(1976). *Attachment and Loss.* 黒田実郎・大羽葵・岡田洋子・黒田聖一(訳)(1976). 母子関係の理論 I 愛着行動. 岩崎学術出版社. pp352-374. pp 389-411.
- 亀口憲治(2004). 家族力の根拠. ナカニシヤ出版. PP 14-26. pp 213-217.
- 柏木恵子(2003). 家族心理学. 東京大学出版会. pp11-15. pp 40-44.
- 数井みゆき(2012). ストレンジシチュエーション法 (SSP). 小林隆児・遠藤利彦(編). 「甘え」とアタッチメント. 遠見書房, pp 209-218.
- 近藤清美(2006). 愛着理論の臨床適用について. 家庭教育シンポジウム. 親子の絆はどこへ行く～現代家族の多様化と愛着理論.
<http://www.hitachi-zaidan.org/odaira/topics/docdata/topics71> (2013年7月3日取得)
- 久保田まり(2008). アタッチメントの形成と発達. アタッチメント研究の発展.
- 庄司順一・奥山眞紀子・久保田まり. アタッチメント 子ども虐待・トラウマ・対象喪失・社会的養護をめぐる. 明石書店. pp 41-50. pp 59-91.
- 草田寿子・岡堂哲雄(1993). 家族機能測定尺度. 吉田富士雄(編). 心理測定尺度集Ⅱ人と社会のつながりをとらえる<対人関係・価値観>. サイエンス社. pp 143-147.
- 目黒依子(1990). 社会的ネットワーク. 望月嵩・木村汎(編). 現代家族の危機. 有斐閣. pp 78-100.
- 宮坂靖子(2001). <近代家族の誕生と変容>-家族の機能と家族関係-. 原ひろ子(編). 家族論. 放送大学教育振興会. pp 133-136.
- 森岡清美(1979) 新・家族関係学. 中京出版. pp 39-45.
- 野村一夫(2002). 家族機能の変容-伝統社会と現代家族. 社会学感覚. <http://www.socius.jp/lec/15.html>. (平成25年12月27日取得)
- 岡堂哲雄(2001). 家族心理学の課題と方法. 岡堂哲雄(編). 家族心理学入門. 培風館. pp 0-11.
- 大野祥子(2010). 「あなたの家族はだれですか？」-「愛犬こそ私の家族」と答える時代. 柏木恵子(編). よくわかる家族心理学. ミネルヴァ書房. pp 6-7.
- 立木茂雄(1999). 家族システムの理論的・実証的研究：オルソンの円環モデル妥当性の検討. 川島書店. pp 13-34. pp 152-163. pp 187-210.